第一章 朔風

「やはり……予備役編入は免れませんか……」
ナイトハルト・ミュラー上級大将が視線を向けたのは、帝国軍宇宙艦隊司令長官たるウォルフガング・ミッターマイヤー元帥だった。
「戦い敗れての捕虜というわけではないからな」
「平時の任務に於いて、不慮の誘拐事件に巻き込まれ、人質にされただけではありますが、それでも？」
「やむを得まい」
ミッターマイヤーの口調は、同情を全く欠くものではなかったにせよ、苦々しさがそれを上回っていた。
「しかし……大将に降等の上というのは気の毒すぎませんか」
「まだ決まったわけではない。ただ、分かっている範囲では、一人ヤン・ウェンリーのみに今次の混乱の責任を負わせるわけにはいかないだろう。ヤンの責任は問うが、帝国軍も自らの身を正す。そうあらねば、帝国軍将兵のみならず、同盟市民の不信をも買うことになる」
「それは、その通りです」
ミュラーも、それ以上の反論、あるいは弁護を諦めて口を噤んだ。
この日、ミュラーは彼の新旗艦『パーツィヴァル』を駆って、はるばるフェザーンから帝都（オーディン）に到着したのだが、彼が携えてきた情報こそが先日来の自由惑星首都星ハイネセンでの動乱に関する詳報であった。在ハイネセン帝国高等弁務官たるヘルムート・レンネンカンプ上級大将が同盟政府に対して、ヤン・ウェンリー元同盟軍元帥の逮捕を勧告し、これに従おうとした同盟政府に対してヤン一派が反撃、レンネンカンプその人を人質として弁務官事務所から奪取するや、そのまま宇宙の深淵への逃亡を企てたというものである。
議場にはミュラーとミッターマイヤーだけでなく、統帥本部総長たるロイエンタール、オーベルシュタイン軍務尚書の両元帥の他、上級大将としてはケスラー、ビッテンフェルトとファーレンハイト、ルッツの四名の姿があった。地球教本部攻撃の際に受けた負傷の本格的な治療中であるワーレン、同盟領ガンダルヴァに留まるシュタインメッツ、そして艦隊演習中のルッツとアイゼナッハの姿はない。
文官としては例によって国務尚書マリーンドルフ伯爵を始めとして、各尚書と国務次官のファン・デル・ファール子爵が列席するほか、技術総監のシャフト技術大将の姿があるのが目に付いた。
「イゼルローンとガルミッシュの機動要塞化工事に関する中間報告があるのだろう」
ビヤ・ホールの親爺めいたシャフトの巨体に対して、一同の認識に大きな差異はなく、また彼らの認識に誤りはなかった。
それよりも、列席者の、どちらかと言えば懸念を帯びた関心を引き寄せていたのが、本来、この会議に必須であるべき人物の不在だった。一つは皇帝ラインハルトの座すべき首座であり、今ひとつは帝国大公として御前会議を主宰すべきジークフリード・キルヒアイスの席だった。
ラインハルトの欠席は会議の開始前に通告されており、『急な

ご発熱のため』という宮内尚書ベルンハイム男爵からの連絡が一同に眉を顰めさせた。キルヒアイスは、この会議に対する皇帝の意向を確認してから遅れて列席する旨が連絡されていた。

男性ばかりの出席者の中に、帝国軍中将の軍服に身を包み、胸元のスカーフ意外には他の列席者と変わらぬ服装をした、ただ一人の女性の姿がある。短くしたくすんだ金髪のために美しい少年のようにも見えた。女性の身ながら幕僚総監と皇帝の首席秘書官を務めるマリーンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルト、通称ヒルダである。

帝国軍において幕僚総監は『帷幄（いあく）』にあり、軍務と政務の連携について皇帝の補佐と助言に任ずべし』とされている。ゴールデンバウム王朝では帝国軍三長官の一に数えられる顕官とされたが、実際には幕僚総監が皇帝の相談役として有効に機能した事例は少なく、名誉を伴うものの実権に薄い虚位とされてきた。

『神々の黄昏（ラグナロック）』作戦末期のヒルダの活躍や、それ以前、その後のラインハルトの治世に対する貢献の大きさから見て、彼女が史上初めての名実相伴った幕僚総監たるべき人物であろうというのが、衆目の一致するところだった。

だが、そのヒルダの表情も明るさと冴えを欠いていた。いつもなら精彩と光輝に満ちたブルー・グリーンの瞳もこの日は何かしらくすみ、灰色の靄（もや）を帯びているようにさえ見えた。美しく背筋を伸ばした、姿勢のよい姿も何かしら肩にかかる重荷を必死に堪えているような危うさすら見ようによれば見て取れるほどだった。

「帝国大公の来着を待つことはない。ミュラーからの報告をまず受けよう」

促したのはロイエンタールである。彼はキルヒアイスから一時的に議長の代行を委ねられていた。

指名を受けてミュラーは立ち上がる。ホロスクリーンが明るくなり、何点かの写真、そして報告書の要約が浮かび上がった。

「シュタインメッツ上級大将の調査結果要約です。レンネンカンプ上級大将の消息、および同上級大将の高等弁務官としての下僚であったラッツェル大佐、フンメル補佐官からの事情聴を含みます」

「これは……」

会議室に、複数小さな呻きに近い呟きが響いた。シュタインメッツの報告は、レンネンカンプが本来の任務を逸脱して同盟政府に対して『不当な』勧告を行った結果が、ヤン一派の窮鼠の反撃につながった事情を、まだ一部の欠落はあるもののほぼ明らかにしていた。

ヤンのハイネセン脱出後、レンネンカンプの行方はしばらくの間、不明だった。一部にはヤン一派に殺害された、あるいは責を負って自決したなどの噂も流れたが、ヤンが消息を絶って約半月後の新帝国暦一年五月一八日、シュタインメッツ艦隊の駆逐艦がバーラト宙域外縁部で帝国軍の救難信号を発していた救命ポッドを回収した。

『我、レンネンカンプ上級大将を発見せり。生命に別状なし』

レンネンカンプ発見の第一報に続き、その一週間後には、シュタインメッツ自らによるレンネンカンプに対する聴取報告がフェザーンのミュラーに達した。特に負傷は見られず、救命ポッド内での長期の疑似冬眠状態による脳への影響も見られない。普通であれば一、二ヶ月の療養の後、任務への復帰も可能なはずである。

帝国軍首脳が顔を見合わせさせたのは、レンネンカンプが明らかに精神の平衡を失った状態にあり、当分の間は軍務の継続は困難であろうとする、報告書に添えられた精神科医の診断結果だった。

「レンネンカンプは予備役編入は免れまい」

ミッターマイヤーが呻くように発言したのは、ミュラーの報告が終わってすぐのことだった。
「治に無用の乱を巻き起こして同盟に対する我が帝国の政策を大いに蹉跌させた上、心身ともに現役を続け得ぬ状態に陥った。そのような人物に現役の上級大将として枢要の地位を与え続けていては、士卒の軍上層部への信頼にも罅を入れることになりかねん。本来であれば、予備役編入どころか、不名誉除隊もあり得るところだ」
「不名誉除隊……ですか」
ミュラーは絶句する。『不名誉除隊』の一言に、ミッターマイヤーの深刻なまでの怒りをミュラーは察せずにはいられなかった。
不名誉除隊とは、有り体に言えば馘首である。単なる惨敗ではなく、要すれば軍法会議に相当し、銃殺にまでは値しないものの、それに殉じるほどの重罪判決の結果としてのみ、この処分があり得る。レンネンカンプは、戦場での敗北を平時における職権の濫用によってヤンに償わしめようとした。この廉潔な軍人がそう考えていることは自明だった。
ロイエンタールは、その金銀妖瞳から一切の感情を消したまま、オーベルシュタインは、義眼に冷然たる光を浮かべてミュラーの視線を受け止めた。他の上級大将、尚書からもレンネンカンプへの弁護が聞かれることはなく、ミュラーはため息をついた。戦場ではなく、平時の任務に於いての虜囚たる屈辱が、レンネンカンプ自身が招き寄せたものであるとすれば、帝国軍の軍法は彼に対して厳格たらざるを得なかったのだ。
「……にしても、同盟政府の当事者能力のなさはどうだ」
ビッテンフェルトの声が、ひときわ力強く室内の空気を圧した。
「確かにレンネンカンプは愚かだった。だが、同盟政府の奴らがまともだったら、レンネンカンプもこんな馬鹿な目は見ずに済んだのだ。違うか？」
敢えて問いかけで言葉を切ったのは、あるいは反論を期待したのかもしれない。
彼の視線は、しかし、同意の沈黙を以て迎えられた。ビッテンフェルトは不満気に唸り、さらに声を荒げた。
「同盟政府はレンネンカンプの馬鹿げた勧告なぞ無視して、ヤンの身柄をこそ保護すべきだったのだ。大体、考えても見ろ、ヤン・ウェンリーは同盟を何度も救った。同盟に対する最大の功労者ではないか。帝国と事を構えている間はちやほやして、いざ戦いに敗れたとなれば、昨日までの英雄も塵芥のように使い捨てる。これが国家の、指導者のやることか」
叩きつけるように自説を開陳すると、オレンジ色の髪の猛将は露骨なまでの批難の視線を義眼の軍務尚書に向けた。
「ビッテンフェルト提督が何を批難されているのかは分からぬが……」
ビッテンフェルトらしい正面からの皮肉は、絶対零度、氷のカミソリと評されるオーベルシュタインの表情筋一筋を動かすほどの影響も与えなかったようだった。義眼が小さく動き、霜を帯びたかにも見える光が小さく閃いて列席者の視野に白い帯を引いた。
「私は別にレンネンカンプを弁護する意思はないし、同盟政府を擁護しようとも思わない。ビッテンフェルト提督の言のごとく、同盟政府は恥ずべき事を為したのであり、その責は問われねばなるまい」
「言葉というのは便利だな」
冷嘲に近い呟きが以外な音量を伴って列席者の息を呑ませ、発

言者に視線を集めさせた。計算しての発言と言うよりも無意識の応答と言うべきでもあり、それが一同に一層の驚きを誘った。
「後付けでどのようにでも言いくるめられるからな」
「……やめんか、卿らは！」
たまりかねてミッターマイヤーがテーブルを叩き、さしもの猛将が思わず首を竦めて絶句する。オーベルシュタインは特に何の反応も示さなかったが、沈黙が帝国軍の誇る双璧の一人、ローエングラム王朝の重鎮に対する敬意を示していた。
「皮肉と当てこすりの応酬は何ものをも生み出しはしないし、列席者にとっては時間の無駄、それを言葉として聞く者にとっては苦痛でしかない！ 帝国軍に於いて元帥たり、上級大将たる卿らがその程度のことすら弁えず、この場にあるとは思わないが、いかがか？」
ロイエンタールは我に返ったように右掌で顎を撫でると、長年の僚友に向けて軽く一礼する。
「済まぬ、議するべきは、ビッテンフェルトの言う通りに同盟政府の当事者能力であって、無用の雑談に時を費やすことではなかったな……無論、レンネンカンプには今次の事態について責の一端を負うてもらうしかないが、同盟政府を不問に付すのでは片手落ちと言うべきだろう」
「その同盟ですが……」
ミュラーが説明を引き取る。レンネンカンプの失踪が知られるとほとんど同時に、シュタインメッツは同盟政府に対して事態の説明を要求した。当初、同盟政府は『国内の事件』に対する不当な干渉であるとして説明を拒否したが、シュタインメッツは歯牙にもかけなかった。
「では、訊く。我が帝国の高等弁務官たるレンネンカンプ上級大将と直ちに連絡を取らせよ。また、ヤン・ウェンリー元帥の所在を知らせよ。これらはバーラトの和約によって保証された正当な要求である。それだけに応じてもらえれば、あとは貴国の国内でいかようの事情が生じようと、それは帝国の関知するところではない」
同盟政府は『それだけ』のことに応じることはできなかった。同盟政府は沈黙を以て応じ、痺れを切らしたシュタインメッツが艦隊をバーラト星系に入れると、数日の猶予を請い、さらにその期限も切れ、シュタインメッツの旗艦『フォンケル』を衛星軌道上に見出すに及んで、ついに一連の騒動の経緯とレンネンカンプの失踪、ヤンのハイネセン脱出をしぶしぶながら説明し始めたのだ。
「右往左往、これに尽きます」
それがミュラーの報告の要諦だった。同盟政府はその場限りの言い逃れと言い訳を繰り返し、説明の矛盾を指摘されるとさらに説明を翻し、さらに矛盾を突かれて説明に窮する。その間に、レンネンカンプが発見され、高等弁務官事務所のスタッフに対する事情聴取を重ねたシュタインメッツとミュラーは、ほぼ事態の背景を突き止めるに至っていた。同盟政府元首である最高評議会議長ジョアン・レベロまでがヤン一党に誘拐され、その身柄と引き替えに、同盟政府がヤン一派のレンネンカンプの誘拐を黙認したという、おそらくは同盟政府が絶対に帝国に知られたくない裏事情まで、彼らの調査の手は及んでいた。
「呆れた連中だ。信ずるに足らん。区々たる外交など不要、直ちに同盟の不正を鳴らし、討伐の兵を起こすべし！」
再びビッテンフェルトの声が周囲を圧する。空気がかすかに揺らぎ、同意を示す呟きが潮騒のように室内に満ちた。
「……今次の事態をしてバーラトの和約に対する同盟政府の違反

行為であるとして、和約を廃し、同盟に対する完全併呑の動員を行う……軍事的にもヤン・ウェンリーを欠き、先般の戦役での被害を回復していない同盟軍の抗堪力は『神々の黄昏（ラグナロック）』作戦前よりも遥かに低下している。一度、我が皇帝（マイン・カイザー）のもと、我が軍が発てば同盟など鎧袖の一触に違いあるまい……」

一同、特に前線部隊を担う上級大将たちの意見を代弁し、ロイエンタールは左右、色の異なる視線を一点に向けた。視線の先に、ちょうど会議室に入ってきた赤毛の青年の姿があった。

「それで、我が皇帝（マイン・カイザー）のご意向はどうなのだ……というより、なぜ、我が皇帝（マイン・カイザー）はご臨席にならぬ」

「陛下は体調がすぐれられず、臨席は見合わす。そうお伝えしたはずですが」

「それは聞いている。だが、わざわざミュラーが、現地の情報とともにフェザーンから駆けつけてくれた。それをもとに、同盟に対する今後の方針を定めるべき場であったはずだ。その場に対して、陛下が何らのご意向をも示されぬというのは納得しがたい」

「陛下は本当に過労だけでいらっしゃるのでしょうか？」

メックリンガー上級大将の口調が気遣わしげに響くのも当然だった。レンネンカンプの失踪が告げられた四月初旬、諸将を召集し、同盟領への出兵を前提とした動員準備を発令して衰えぬ覇気を見せたラインハルトだったが、その病臥の知らせが帝国政府首脳を驚かせたのはその直後だった。それまでの発熱同様に一週間あまりで病床を払い、玉座にもどったラインハルトだったが、その後もしばしば発熱が伝えられた。この日も早朝になって皇帝の発熱と会議への欠席を伝えられ、諸将の見交わす視線にうそ寒い不安が漂い始めていたのも事実だった。メックリンガーが、日記にラインハルトの病臥に関する記載が急激にその数を増やし始めているのに気づいたのは、この僅かに後の時期である。

「こうもご病臥が多くなるというのは単なる過労や風邪とは思われません。この際、徹底的な精密検査をお受け頂くこともお考え頂きたい」

「それは了解しております、メックリンガー提督」

キルヒアイスの表情にも翳りが濃かった。

「それは既に何度もお勧めしていますが、あのご気性ですから、素直に吾々の申し上げることにお従いにはならないのが悩みの種です」

「そう呑気に構えている場合ですか、帝国大公。確かに陛下はお若く、覇気に溢れておられる。しかし、若さや覇気の強さが無病や長寿を保証するものではないことは、人の歴史に鑑みれば自明でありましょう。重い病でなくとも、今、帝国は困難とは言わぬまでも難しい局面に立っており、陛下のご判断を待つこと大であることはご了解願いたい」

「それも了解しております」

「……帝国大公のご指示を受け、文理科大学医学部のフランツペーター・バウアーシュミット准教授に対して復職の手続きをとっております」

ゼーフェルト学芸尚書の言葉に、列席者の過半が顔を見合わせた。

「バウアーシュミットだと……誰だ？」

「お忘れですか、ビッテンフェルト提督。提督方に義務づけられた定期精密検診のことを？」

「ん……」

しばらく考え込み、やがてビッテンフェルトは大仰すぎるほどの身振りで手を打った。
「そうか、あいつか」
もう一昨年前になる。ラインハルトが初めて高熱を発した時の宰相府当直医師を務めていた文理科大学の医師であり、彼の進言で帝国軍の全提督に対して定期的な精密検診が義務づけられるようになった。ビッテンフェルトなどは『俺の身体のことは俺が一番よく知っている。精密検診など不要だ』などと決定に反発していた。『俺の身体に何の問題があるっていうんだ』とばかりに自信満々に望んだ検診で、『将来、癌化する恐れのある病変の前兆があります』との診断を受け、目を白黒したのが『大親征』の直後である。その後、治療を受けて完治すると、今では部下の高級士官たちに積極的に受診を勧めて回っている。
「医者というのは偉いものだ。自分では分からんような問題も見つけてくれて治療してくれるんだからな。いずれ戦場で死ぬにしても、身体の不調のせいで判断を誤ったなどと後世に伝えられたら末代までの恥だからな」
医者嫌いの部下に対しては、ビッテンフェルト自身がそう説得したとかしないとかの噂が流れ、同僚達の苦笑を誘ったものである。
「バウアーシュミット医師は、今、故郷のランメルスベルグ星系にて謹慎中ですが、既に学芸尚書命令で謹慎を解除し、一ヶ月以内には文理科大学に復職します。その後、皇帝陛下には同医師のもとで精密検診を受診して頂く予定になっております」
「なぜ、そのバウアーシュミット……か、バウアーシュミットでなければ陛下の精密検診が叶わんのか。他にいくらも優秀な医師はいるだろうに」
ロイエンタールの反問に、キルヒアイスの眉が再び曇る。沈黙を守ったまま、ヒルダが、気遣わしげな眼差しでキルヒアイスとロイエンタールを交互に見交わした。
「それは……今の時点では明確にお答えできませんが、一昨年一〇月以来、バウアーシュミット医師は継続的にラインハルト陛下の健康維持に携わってきております。継続性という意味で、彼の手を煩わせるのが最も効果的と、この件については陛下ご自身のご了解を得ております」
「一昨年一〇月……か」
ロイエンタールの眉が微妙な角度に動くのに、ヒルダが再びはっとしたように身じろぎする。
「では卿は、こう考えているということだな、帝国大公。我が皇帝の病は一過性ではないかも知れない。一昨年一〇月以来、何らかの病を陛下が患っておられる可能性がある、と」
「……否定はしません、ロイエンタール提督」
やや苦しげにキルヒアイスは頷く。バウアーシュミット医師の復職には、彼が提出し、今もなおその所在が明らかになっていない『変異性劇症膠原病とローエングラム公の病状の関連性に関する詳細報告』なるレポートの存在がある。レポートの存在とその表題がキルヒアイスの知るところとなったのはまだ一ヶ月余り前のことで、彼と情報を共有しているのは今のところはヒルダ一人であり、ラインハルト本人にもまだレポートのことは伝えていない。表題だけでは、『変異性劇症膠原病』なる疾病がどのような病であるのか、致命的なものなのか、そもそもラインハルトが罹患しているのかすら不明である。それらをまず確認し、治療が必要ならば可能な限り早く着手する。その一方で、あるいは一定期間にわたって皇帝不在

の事態も予想しなければならない。
　皇帝の不在までを予期したわけではないが、キルヒアイスはかねてから帝国の統治機関についての研究を進めている。数ヶ月前、フェール星系という辺境星系で『亡命帝』ことマンフレート二世の側近の蔵書が発見され、帝国大公府にもたらされている。蔵書の大半が、自由惑星同盟から持ち帰られた民主共和政体に関する研究書だった。キルヒアイスとしては帝国に直ちに共和政体を持ち込む意思はなかったものの、皇帝親政体制によるラインハルトへの極度の負荷集中を緩和する手段としての、皇帝権力の執行機関の構想を固めつつあるところだった。
　キルヒアイスの意思は、無論、一切が集中することで、ラインハルトが統治に疲労してしまう事態の回避だった。暴君として即位する帝王も皆無ではない。かの『流血帝』アウグスト二世のように。しかし、賢帝・名君たろうとして挫折し、統治の義務を放棄した皇帝こそが、帝国と帝国の住民にとってより大きな害毒の源となり得るのだ。ラインハルトと、そしてアンネローゼとともに、一五年近く前のあの『黄金の時』を再び迎えるために、これはやらねばならぬことだった。
　同時に、皇帝ラインハルトという巨大で偉大な個性のみに依存している現在の新帝国は、極めて危険で脆弱でもある。キルヒアイスの構想する権力執行機関は、そうした一極集中のリスクに対しても効果的な対策となり得るはずだった。
　ただ、研究の完成にはまだ数ヶ月以上を要する見込みであり、公開と実施についても帝国内部で十分な検討と同意が不可欠だった。中途半端に研究内容が公となった場合、見ようによれば、これは『帝国大公による簒奪』とすら見えかねないのだ。更には、皇帝ラインハルト個人に対してのみ、その剣を捧げているような元帥・上級大将クラスもまた、彼らの忠誠に対する冒涜として、キルヒアイスの考えを受け止める可能性も小さくなかった。キルヒアイスの見るに、最も危険なのがロイエンタールであり、ロイエンタールが異議を申し立て、上級大将クラスではビッテンフェルトやファーレンハイト、場合によりシュタインメッツら『武断派』と称すべき面々が同調して反発した場合、キルヒアイスといえども容易ならざる立場に立たざるを得ないだろう。
「可能性はゼロではない。というよりも、可能性をゼロにすべく、最善の策を採りたいというのが私の立場です」
　あるいははぐらかされたとロイエンタールは思ったかも知れない。秀麗な眉目の間に不快さと苛立ちを示す影が過ぎった。直ぐに統帥本部総長としての表情が取って代わりはしたが……
「よろしい。我が皇帝のご病気に対する措置は理解した。同盟に対して、吾らがどう動くべきか、この点について陛下の御意が得られているのか、その話題だったはずだが？」
「既に動員準備令が下されています。ラインハルト陛下は、同盟に対して期限を切って今次の騒乱の説明を要求することと、これが容れられぬ場合、あるいは陛下が納得される説明が同盟政府より提示されない場合、和約の破棄と、同盟領に対する再度の出兵をご指示なさいました」
「勅令は出るのか。いや、卿を疑うわけではないし、我が皇帝なれば、さてしもあるべき御意であるとは思うが、吾らは人づてに陛下の御意を得るに馴れていない」
　言葉は穏やかだったが、口調は白刃の鋭利さを孕んでいた。
　キルヒアイスの口調もまた、内心に一瞬走った緊張の片鱗すら

見せることなく、あくまで穏やかだった。
「無論です」
「その出兵はやはり親征になるのか、それとも誰かが総指揮を代行することになるのか……？」
「まだ、陛下のご体調の問題がある以上、順当に行けば私が皇帝陛下の代理人として総指揮を執ることとなりましょう。さもなくば、統帥本部総長、もしくは艦隊司令長官に大命が下ることもありえます」
「つまり親征はないということか。ならば、卿であろうと、ミッターマイヤー提督であろうと、あるいは私自身であろうと大した違いはあるまいが、その場合、対同盟の外交・政略は総指揮官に一任されるのか、それとも単なる代理人としてすべてを帝都に仰ぐことになるのか？」
「対同盟の外交を含め、一切を一任されましょう。誰が総指揮を委ねられようと、です」
「そうか」
頷き、ロイエンタールはオーベルシュタインに視線を転じた。
「その場合、皇帝ならざる者が大兵を率いて出兵し、戦場での一切の兵馬の権を預かることになる。卿は異論はないのか？」
「これは異な事を」
嘲笑も冷嘲も苦笑もない。オーベルシュタインの応答は平板を極めた。
「これはナンバー2云々の問題ではない。前線においては時に君命をも奉ぜざるあり。兵馬の権の常識であろう。それを否定するがごとき勅命あらば、陛下への諫止が吾らの義務ではないか」
「つまり、異議はないと了解して良いのだな」
「諄い、と言えば総長には了解頂けようかな？」
「一応……はな」
再び苛立たしげに掌がテーブルを拍つ音がした。
「陛下は自由惑星同盟に対して出兵の準備を命ぜられた。総指揮は、帝国大公、あるいは統帥本部総長、もしくは宇宙艦隊司令長官たる小官のいずれかに全権を委ねられるとして、閣議にて承認された。ただ、それだけの手続きを経るだけのことに、何を吾らがこうも曰くありげな言葉を交わさねばならんのだ。陛下を欠いただけで、吾らは意思決定一つ、まともにできぬ烏合の衆にでも成り下がったというのか!?」
再びロイエンタールが苦笑し、僚友に軽く一揖する。
「今日は叱られてばかりだな……卿の言う通り、ご不在に際して無用、無様な議論を重ねていては、我が皇帝に十分のご休養をとって頂くこともままなるまい。動員についての予算は国務尚書と財務尚書の了解を得ており、既に帝都駐留の三個艦隊に出師準備が整っている。これに、フェザーンのミュラー艦隊、ガンダルヴァのシュタインメッツ艦隊を併せれば動員兵力は五個艦隊強、艦艇六万八〇〇〇隻、補助艦艇一万一五〇〇隻、兵員一〇一一万人余となる。自由惑星同盟の残存兵力を一蹴し、場合によりそのまま同盟を併呑するに十分な兵力と考える」
財務尚書のリヒターが発言を求めた。
「財務的な観点から言わせて頂くなら、現時点での同名の併呑は望ましくはない。この点を強調させて頂きたい」
「理由は？」
ロイエンタールが微かに眉を顰める。
「同盟の抱える負債です。同盟がこれまでに発行した国債が莫大な

額に上っていることはご存じと思うが、同盟の併呑は、同時にこの国債をそのまま帝国の財政への負担に帰せしめることを意味します」
「同盟の借金を吾々が返さねばならないと言うことか？」
何となく情けない口調になったのはファーレンハイトらしかった。『食うために軍人になった』と公言するだけあり、あるいは過去の窮乏に思いを致したのかも知れない。ルッツが呆れたような目を向けると、苦笑して新王朝の重臣たるべき表情を取り戻した。
「同盟（やつら）が勝手に作った借金など、俺たちが……いや、帝国が返す義務はないはずではないか」
「そうはいきません」
軍人は単純で困る……と言いたげに、リヒターはスクリーンに資料を表示させた。
「この通り、同盟の国債はフェザーンの金融資本が引き受けています。フェザーンの金融資本は同時に、帝国の国債をも多量に引き受けており、彼らは帝国と同盟の国債を細分化して組み合わせた金融商品として一般市民に販売しております。フェザーン市民だけではなく、フェザーン・帝国・同盟の金融機関から一般の事業者、さらには市民たちに対しても、です」
「言ってることがよく分からん、もっと簡単に言ってくれ」
こちらは学者はもって回りすぎて話が分かりづらい……と言わんばかりのビッテンフェルトである。リヒターは苦笑し、彼の同僚であるブラッケも肩を竦めた。
「まあ、こういうことですな。ここに一〇〇帝国マルクの債権があるとしましょう。この内、六〇帝国マルクは帝国の国債ですが、三〇帝国マルク分は実は同盟の国債、そして一〇帝国マルクはフェザーン商人が発行した社債ということになります」
「で……？」
「もう少し話を聞いてください、ビッテンフェルト提督。今、仰るように同盟を併呑し、その国債の引き受けを帝国が拒否したとなると、同盟の国債は紙くずになります。つまり、一〇〇帝国マルクの債権の内、三〇帝国マルク分の価値がゼロになり、一〇〇帝国マルクと思っていた債権は、七〇帝国マルクの価値しか持たなくなる。要すれば、あなたの財布から三割の現金が勝手に消滅する……極端すぎますが、そういうことです」
ぎょっとしたようにファーレンハイトが胸ポケットを探り、ビッテンフェルトも呆気にとられたようにリヒターの資料を凝視した。
「そんなことが起きるのか？」
「まあ、ひどく乱暴で、いい加減なたとえ話ですが、概略としてはそんなところです」
バーラトの和約にともない、帝国はフェザーンの金融機関に対して同盟国債の新規引き受けを全て禁止させた。同盟政府は、和約によって得られた巨大な軍事予算からの解放では帳消しにできないほどの財政上の大打撃を受けている。同盟の財政は縮小再生産のダウンスパイラルに入り込み、国内は急速なデフレ状態となって生産力は減衰の一途を辿り始めていた。
「同盟にはこのまま、既発行の国債償還と国力の衰耗を引き替えにして政治組織として消滅して貰う、これが帝国の財政からすれば完璧なシナリオです。同盟の中核部分は要するに破産させ、まだ生産力を残している周辺宙域の有人星区は同盟から解体して、まず経済的に、しかる後に政治的・軍事的に、文字通りに帝国領に吸収併合

していく。実際、現時点まで同盟はこのシナリオに従うままに衰弱死への道を歩んでいた。レンネンカンプ提督は、もはや死に体の同盟に無用の刺激を与え、ヤン元帥を自由の身にして宇宙へと解き放った。ヤン元帥の下に、一旦は衰亡しかかった同盟の勢力が再結集し、帝国との新たな紛争への道を開くとすれば、レンネンカンプ提督の失策は、不名誉除隊どころではない。銃殺刑にも値する大失態です」

異論があるか、とばかりにリヒターはビッテンフェルトを睨み付け、そのまま視線をロイエンタール、オーベルシュタイン、そしてキルヒアイスへと転じていく。

「財務省からの要望はお伝えしました。作戦立案にあたり、参考情報として頂ければ幸いです」

「……陛下からも、バーラトの和約の破棄は当然としても、直ちに同盟の完全併呑は避けるようとのご指示が出ております」

キルヒアイスがリヒターの言葉を引き継いだ。

「作戦の具体案は引き続き統帥本部にて検討を続ける」

ミッターマイヤーは頷いたが、ロイエンタールはやや非好意的とも見える視線をキルヒアイスに一度投げただけで、直ぐに目をホロスクリーンに戻してしまう。

「国債だの、経済だの、面倒なことだな！」

「金がなければ戦争もできん、国も建てられん、やむを得ない」

「――ったく、なぜ卿はそう貧乏くさいのだ」

「性分だ。卿は、金のわいてくる壺でも持っているのか？」

「俺は金ではなく、艦隊が湧き出てくる壺が欲しいところだ」

「金がなければ艦隊の整備もできんのだぞ、分かっているのか」

「私語を慎め、本来なら御前だぞ！」

ビッテンフェルトとファーレンハイトのやりとりを見かねたか、再びミッターマイヤーが注意を喚起するが、口調に先ほどまでの苛立たしさは消えている。皇帝ラインハルトの意向が示され、ともかくも首脳達の意思に一致を見たことに安堵を覚えたに違いなかった。

「……あとは、シャフト総監、機動要塞工事について中間報告を」

キルヒアイスの言葉に、シャフトが巨体を揺るがせるようにして立ち上がる。過日、ガイエスブルグ機動要塞実証実験成功の祝賀の場で、『機動要塞の完成は、大神（オーディン）の与えたもうた千載一遇の好機』としてイゼルローン回廊侵攻を進言し、ラインハルトの不興を被（こうむ）っている。

もともとラインハルトはシャフトの人柄も能力も認めておらず、更迭の機会を探っていたが、シャフト自身が早い時期からラインハルト支持の立場を明確にしていたことと、技術総監部に彼に代わり得る人材が払底していたこともあり、なおも彼をその地位に据えているのである。自らを大神（オーディン）になぞらえる失言は、ローエングラム元帥（当時）に対する重大な不敬として批難されるに足りたが、それでもラインハルトがシャフトの更迭を見送ったほど、技術総監部の人事は困難だった。

「いっそ、技術総監部を廃し、艦政本部に統合してしまってはどうか？」

ラインハルトからその意見が出たのが一月ほど前で、キルヒアイスとオーベルシュタインが意を受ける形で組織統廃合の検討を急ピッチで進めている。検討が完成したとき、シャフトは皇帝自ら『技術総監解任・予備役編入』の辞令を手渡され、自らの立場を知ることになるだろう。もちろん、予備役入りに際しては『技術上級

大将』への昇進と一時金、一〇万帝国マルクの終身年金が与えられ、『後進に跡を譲っての勇退』の形式はとられることになっていたが、長年、技術総監部を支配した権力は奪われ、技術将校として初の帝国元帥の印綬を帯びる夢は砕かれることになる。

無論、そんな事情は知らぬげにシャフトは自信満々に語り始める。ガルミッシュ要塞……近々に名前を変えられ、影の城（シャーテンブルク）要塞となる予定だが……の工事がほぼ完了し、まもなくワープ実験に入れること。イゼルローン要塞の機動化はやや遅れているものの、向こう二ヶ月以内には完了できる見込みであること……などである。

「順調順調と自慢げだが、何、ケンプとミュラーがガイエスブルグで苦労したからこその順調さではないか。むしろ、それだけの積み上げがあるのになぜイゼルローンが遅れるのか、そっちの方が問題ではないか」

「これは心外です、ビッテンフェルト提督。ガルミッシュに較べてイゼルローン要塞は帝都からも遠い回廊内にあり、資材の搬入や検証実験似も大きな制約がかかるものですぞ。それをこの程度の遅れで済んでいるのですから、十分期待以上と考えて頂いてよろしいのではありませんか」

「イゼルローンが難しい地勢にあることくらい、最初から分かっていた。それを計算に入れていない計画なら、計画を立てた奴が馬鹿だし、計算に入れてなお遅れるなら、計画時に見通せていなかった遅れる要因があるはずだ」

ビッテンフェルトは単純無類・猪突猛進オンリーの猛将と見られているが、それだけではない。シャフトに対して浴びせた論難は、三〇代にして上級大将の地位を得るに相応しい識見の所有者であることも示している。

「その要因の分析と対策もなく、ただ難しい宙域だから遅れます……そんな程度なら新任の少尉でも報告できるぞ、技術大将」

思いもかけぬ猛将の論理だった指摘に、シャフトは鼻白んで絶句する。

「ビッテンフェルトの意見ももっともだ。ただ、遅れと言っても全体から見れば数パーセントでもあるし、今後、遅れが拡大しないよう監視を続けると共に、遅れが拡大し始めた場合には速やかに対処し、報告する。その程度で良いのではないか。報告さえ適切なら、技術大将の手に負えない緊急事態が起きたとしても、帝国としてこ入れすることも可能だろう」

口を挟んだのはロイエンタールである。別にシャフトに助け船を出すつもりでも何でもなく、ただ事実を指摘する。それだけの口調だった。

「俺に……いや、小官に特に異論はない。統帥本部総長の意見を是としたい」

「それでシャーテンブルグ要塞のフェザーン回廊回航はいつごろ可能となりますか？」

「は、はい……」

シャフトは、茹で上がったような顔から汗を拭い、スクリーンを操作する。スケジュール表が表示され、日程がフラッシュした。

「予定通り、来月には回航を開始。七月中旬には帝国側出口に定置できる見込みであります、帝国大公閣下」

「イゼルローン要塞のワープ実験は？」

「こちらは九月に入ると考えております。ご存じの通り、イゼルローン回廊は重力状態が不安定です。ワープ実験のできる時期は、九月の中旬に一回と、下旬に二回、その程度と総監部では予測して

おるしだいです」
「分かりました。先ほどの統帥本部総長とビッテンフェルト提督からの意見通り、工期の遅れについては監視と対策を。変化点あれば、ただちに報告願います」
いつものキルヒアイスらしく主要な議題を次々に裁き終えると、キルヒアイスは会議の終了を告げる。
会議の緊張が解け、出席者の内のある者は持ち場に戻るべく端末を片付けてそそくさと席を立つ。またある者は、個人的な用談、あるいは雑談のためになお議場に残り、そこここに小さな人の輪と、それを避けて室外へ向かう人の流れが生じた。
「キルヒアイス提督……」
足早に執務室への帰路を辿り始めたキルヒアイスの背に、ヒルダのかけた声は明らかに周囲を憚るものだった。
「執務室へお願いします、フロイライン・マリーンドルフ」
キルヒアイスも振り返りもせずに応じる。長身の幅の広い背中が、立ち止まる様子すら見せずに足早に視界から去って行くのを、ヒルダはしばらく通路に佇んで見送った。
ヒルダは自らに活を入れようとするかのように軽く頬を叩くと、彼女本来の職場につま先を向けた。皇帝主席秘書官、あるいは幕僚総監、いずれであっても彼女の職務は皇帝への補佐と助言であり、皇帝その人が健在であってこそ多忙を極める立場である。逆に言えば、ラインハルトが病臥して玉座が不在になってしまうと、業務そのものは激減する。皇帝を補佐し、助言するための調査や研究、連絡などの作業は依然として膨大であったとしても、ヒルダにしてみると単調なルーティン・ワークを何歩も出てはいない。
朝まだきに『皇帝発熱』の知らせを受け、慌てて自宅を飛び出して、キルヒアイスとともに病床にラインハルトを見舞うとともに、今日の御前会議に示すべき皇帝の意向を質し、それを会議提出可能な内容に整理した。二時間弱の目まぐるしいほどの慌ただしさが過ぎ、キルヒアイスに先んじて議場に入ると気が抜けたような、妙な脱力感に襲われたのだ。

脱力感の所以は睡眠不足と、早朝からの激務から来る疲労だけではない。昨夜、父のマリーンドルフ伯爵と交わした会話にも一因があった。
「エルネスタ叔母上だ」
不意に父が口にした名前に、ヒルダは思わず顔をしかめた。脳裡の人名録の一番後ろ、あまり思い出したくない人々のグループに、その名前が隠れていた。
「ええ？」
マリーンドルフ伯爵も、エルネスタという人物には良い評価を与えていない。いかにもしぶしぶという口調で続けたのだ。
「そのエルネスタ叔母だ。母上の実家のことは知っているね？」
「ええ、今の御当主にはご子息が一人おられて……ええと……」
あのリップシュタット戦役のおり、ヒルダは親族・姻族に共にラインハルト陣営の支持を訴えた。無論、ラインハルトに彼女が要求した家門と領地の保証については、ラインハルトとの約定通りに彼らには勧めなかった。それでも目端の利いた何人かは、自発的に保証を要請し、ラインハルトは当然のようにそれに応えたが、決して多数派ではなかったため、ラインハルトはヒルダが約束を守ったことを信じた。ヒルダの亡き母の実家も、ラインハルトの支持には

与したものの、当主の伯爵は家門・領地の保証について思いが至るほどの慧敏さは欠いていた。結果としては戦役後、貴族への過重なまでの課税や特権の剥奪によって見る影もなく没落し、今はマリーンドルフ星系の一画で伯爵家の保護の元、辛うじて余喘を保っている。

ヒルダの母には複数の妹がいて、末妹はキュンメル男爵家に嫁いでハインリッヒを生んだが、彼女のハインリッヒ同様に繊弱な健康は長寿を許さなかった。エルネスタ叔母は、キュンメル男爵夫人の直ぐ上の姉であり、没落したかつての伯爵家の一員として日々を送っている。

ヒルダは、このエルネスタ叔母が苦手だった。嫌っていると言っても良い。とにかく口数が多く、ヒルダが大学に進むにしても、高等学校時代に大学のオープンセミナーを受けるにしても『女に学問なんて不要よ。男は学がある女が嫌いなの。それより可愛い女になる努力をなさいな』などと反対し、父やハンスを大いに悩ませた記憶がまだ新しい。さらに、ことあるごとに『あなたは昔からかわいげのない娘でしたからね、今更忠告しても手遅れかも知れませんけど』などと余計なフレーズを付け加えてヒルダの神経を苛立たせる名人でもあった。

とは言え、父マリーンドルフ伯爵にしてみれば亡妻の妹であり、ヒルダにとっても数の少ない親族の一人であって、彼女が何か言ってくるごとに対応に苦慮する……のが毎度のことだった。

エルネスタ叔母の意識はゴールデンバウム王朝時代から幾らも変わっていない。彼女にしてみると、国務尚書と皇帝主席補佐官・兼・幕僚総監。旧王朝であれば顕官の極みとも言うべき地位についたはずのマリーンドルフ伯爵とヒルダが、亡き妻の、そして亡き母の実家を引き立て、彼女自身の言葉を借りれば『少なくとも侯爵くらいの待遇をしてもらっても当然』ということになるのだ。

「カストロプ侯爵家でしょう、それからキュンメル男爵家でしょう、どっちも伯爵家のものになったんなら、どっちか一つ、我が家に頂けるよう皇帝陛下におすがりして頂けないかしら」

つい最近も、そんな要求を持ち込んできて、マリーンドルフ伯爵を困惑の淵に立ち竦ませた。カストロプ侯爵家もキュンメル男爵家も帝国に対する叛逆者として処分され、領地も資産も帝国に公収されている。エルネスタの実家に分与するようなものは何もマリーンドルフ伯爵家には与えられていない。むしろ、ハインリッヒ・フォン・キュンメルの起こした事件は、マリーンドルフ伯爵家の存続すら危うからしめた。ラインハルトが、罪は武器にあるのではない、武器を使った人間にある、として温情を示してくれていなければ、族滅の処断すらあり得たのだ。ただ、エルネスタは口数は多いが、他者の言葉に対して傾ける耳を持たないという悪癖がある。彼女にとって彼女自身の意見が絶対的な真理であって、他者のいかなる考えも、自分のそれと食い違えば誤りなのである。

「また、苦情でしょうか、お父さま」

「苦情ではないから困っている」

疲れたようにため息をつき、映話に二時間もつき合う羽目になったとマリーンドルフ伯爵にしては珍しい愚痴だった。

「苦情でないとすれば、なんでしょうか」

「……」

即答しかねたらしい。自ら立ってサイドボードからブランデーの瓶とグラスを取り出す父に、ヒルダは奇異の視線を向けざるを得なかった。

ブランデーを一口啜ってから、伯爵は大きく息をつき、それから苦いものでも吐き出すようにその言葉を告げた。
「お前の縁談だよ、ヒルダ」
「縁談？」
一瞬、父が何を口にしたのかを理解し損ね、ヒルダはオウム返しに呟いた。それから漸く言葉の意味が理解に達し、両目が大きく見開かれた。
「縁談ですって？　誰の？」
「お前の、だと言ったつもりだがね、ヒルダ」
「わたしの……ですか？」
「そうだ。お前がさっき言った通り、お前の母上の実家の当主には子息が一人ある。名はフュルヒテゴット、今年二七歳だった……と思う。エルネスタが持ち込んできた縁談の相手が、そのフュルヒテゴットだ。フェルヒテゴット・フォン・マイヤーハイム」
「なぜ、そのヘル・マイヤーハイムとわたしが？」
「マリーンドルフ伯爵家本家、つまり私の家と言うことになるが、その伯爵家本家の跡を継ぐべき存在は、今の所お前しかいない。多分、これから先、増えることはないと思うがね」
それが父にしては珍しい冗談であることに、ヒルダは、これも珍しいことに直ぐには気づかなかった。
「わたしがマイヤーハイム家に嫁いでしまったら、マリーンドルフ伯爵家を嗣ぐ者がいなくなってしまいますわ、お父さま」
「お前がフェルヒテゴットと結婚すれば、フェルヒテゴットにマリーンドルフとマイヤーハイムの両家当主を兼ねさせ、マリーンドルフ・マイヤーハイム伯爵家とすれば良い。それがエルネスタの主張だった」
「叔母様らしいですわね」
困惑するマリーンドルフ伯爵家に向かってエルネスタは二時間近くにわたってまくし立て続けたらしい。
「これこそ、大帝以来の二つの名家を当代で絶やすことなく、次代へ繋いでいくための唯一の方法なのよ。これを実現するのが、マリーンドルフ伯爵家当主としてのあなたの神聖な義務であり、権利であり、喜びでなくてなんだというのですか。これは絶対に実現しなければなりません、マリーンドルフ伯爵家とマイヤーハイム伯爵家が一つになり、新王朝の続く限り、新帝室の藩屏としてその血を伝え続けていくための、唯一にして無二の、これこそが神の御技（みわざ）ですわ。そうですわ、そうですとも、そうですわ、そうですとも、皇帝陛下に、そうです、皇帝陛下に直訴し奉って、高貴なる青き血の継承のため、両家に婚姻を命じて頂きますわ。ええ、直ぐにこの地を発ちます。帝都で皇帝陛下に謁を賜り、そのようにお願いし奉ります。フランツ、皇帝陛下にわたくしに謁を賜るよう、明日にでもお願いしてくださいな。そうそう、ヒルダが皇帝陛下の秘書官でしたわね。ヒルダに命じておいてくださいな、帝国にとって喫緊の問題について陛下に申し上げたき議あるによって、エルネスタ・フォン・マイヤーハイムが皇帝陛下に直々にお願いに上がると、そのように陛下に申し伝えるように。いいですか、すぐにですよ。あの娘が帰ったら、直ぐに言いつけてください。これは重大な……」
ヒルダの存在など、両家を繋ぐための道具程度に見ているらしい。要するに落剥し、貴族としての来面すらマリーンドルフ伯爵家に支えられている日々の状況に不満をため込んだ挙げ句に、婚姻でマリーンドルフ伯爵家との縁故を強めれば、我が家もまた新帝国の枢機に参画できる。皇帝の権威を背に、かつての伯爵家の栄華を再

びすることができる。そう結論づけたのだろう。ヒルダにすれば見え見えの、噴飯物の浅知恵である。
「叔母様、まったく分かっておられないんのですね」
「分かっていない。分かっていないことを分かっていないし、分かっていないことを分かろうともしない」
「ええ……でも、お父さま、このフェルヒテゴットという人物とは面識はあるんですの？」
　驚いたようにマリーンドルフ伯爵の目が大きく動いた。
「会う気なのかね？」
「会わなければ、いつまでもエルネスタ叔母さまはお父さまを煩わせ続けるでしょう。どのような人物なんですか？」
「う……む」
　もう一口、ブランデーを口に含むと、伯爵は記憶をまさぐる表情になる。ヒルダも、母の実家の当主は名前こそ知ってはいるものの、年齢も容貌も記憶の内にない。一度の面識もないか、余程に希薄な印象の人物であろうし、その長男に至っては名すら今初めて知ったほどである。
「確か……一応、軍務の経験はあったのではないかな。イゼルローン要塞に行ったことがある……と聞いたことはある。どんな人物なのかと言われると、私にも答えようがない。会ったとしても、覚えていないな」
　幾ばくかの苦吟の後の伯爵の回答は、ヒルダの予想を大きくは外さなかった。マリーンドルフ星系に引きこもったまま、一度も外宇宙へ出たこともない、繊弱な若者を予想していただけに、イゼルローン要塞で軍務に就いたことがあるというのだけは予測の枠外だったが。
「帝都へ来るように、御当主にお願いできるでしょうか、お父さま。できれば、先に帝都に出てきてもらって、それからエルネスタ叔母がそのことを知ることになるように……わたしがマリーンドルフ星系へ赴かない理由、お父さまにはお分かりと思います」
「分かった」
　伯爵の苦笑が深くなった。
「連絡を取っておく。それで会ってどうするのだね？」
「もし、ひとかどの人物だったら、相応しい地位に就けるように取りはからいます。そうでなければ、帝都に留まって世の中を見て頂くか、マリーンドルフ星系へ帰って頂きます」
「そう簡単に帰ってくれると良いのだがね」
「やむを得なければ強制します」
「だから帝都に呼ぶわけだね、分かった」
　その夜の会話はそこまでだった。伯爵もヒルダも翌朝早朝からの御前会議への出席を予定していた上に、国務尚書と皇帝主席秘書官の職務は、父娘の早い時間の帰宅を許してはくれなかったのだから。
　軽い食事と入浴を済ませて直ぐに寝室に引き取ったヒルダだったが、この夜に限って直ぐには眠りの世界が訪れてはくれなかった。
「縁談……」
　これまで、自分とは(ほとんど)関係のないと思っていた単語を正面からぶつけられたことで、心の裡に微かな引っかかりのようなものが渦巻いていているようだった。確かにマリーンドルフ伯爵家の血筋を引く存在は彼女一人であり、彼女がこの先、誰とも婚姻を結ばないとするならば、伯爵家は彼女の代で絶えることになるが、ヒルダには家柄や血筋に関するこだわりは皆無だった。

脳裡に渦巻き続ける、形のない蟠りをとつおいつ追いかけ、追いかけては逃げられ、それが微かで曖昧な、どこか見慣れた印象の輪郭をなし始めたころ、漸くに浅い眠りが訪れた。眠りの神の手に身を委ねて幾ばくかの時が過ぎたとき、不意にヒルダは目を見開き、ベッドの上に身を起こした。

「皇帝陛下!?」

鮮やかすぎるほどに鮮やかに浮かび上がった、豪奢な黄金色(こがねいろ)の鬣を思わせる髪、超高温の蒼い焔を封じ込めた双眸の、鮮烈な容貌の若者の姿が虚空にくっきりと姿を現した、とヒルダは思った。夢とは思わなかった。ヒルダは、ラインハルトの声を聞いたのだ。

「フロイライン・マリーンドルフ、わたしを救けてくれ、わたしにはあなたの救けが必要だ」

既に夜明けの光が差し初めていた寝室の、ベッドサイドで通信端末が点滅し、緊急の着信を知らせたのがその瞬間だった。

あの会話が原因だ……秘書官室で優先順位の高い順に業務を片付けながら、ヒルダは思っている。思いもかけず、『縁談』などという耳慣れぬ言葉をぶつけられたことで、確かに自分は動揺していた。ただ、なぜそれほどまで動揺を感じたのか、また、ラインハルトの発熱を知らせる一報の前に、夢と思われぬほどに鮮明に見た……と思ったラインハルトの姿と、その声の理由はまるで分からなかった。

「いいえ……違うわ」

はっきりとかぶりを振る。あの言葉に動揺し、心の底深くに沈んでいた何かしらがきっかけを得て、心の表層の浮かび上がってきた。その何かしらこそ、皇帝ラインハルトその人に他ならないのではないか。あの言葉とラインハルトがなぜ結びつくのか……簡単な結論を心に上せるのが、これまで恐れという感情とは縁の薄かったヒルダにさえ恐ろしかった。これほどまで自分の心が揺れるままに収まる位置を見いだせない経験は、彼女にとってはじめてのことだった。

そうした心の揺らぎが、この朝、ヒルダの表情と頭脳から冴えを奪い、御前会議での発言を躊躇わせるまでに至ったのだ。

ヒルダが一旦執務を切り上げ、キルヒアイスの執務室へ向かったのは、一時間も経たぬうちのことだった。

「バウアーシュミット医師の件ですね」

キルヒアイスは前置きの一切を省略した。

「バウアーシュミット医師に護衛を派遣してください、提督」

ヒルダの応答も短い。キルヒアイスの青い目が細く、鋭くなり、帝国随一の驍将たる射貫くような眼光に変わった。

「皇帝陛下のご健康が損なわれることを歓迎する者が、今日の会議の出席者の中にいる……と?」

「それは断言できません。ただ、こう考えてみただけです。もし、万が一にも皇帝陛下が、バウアーシュミット医師の報告にあった『変異性劇症膠原病』という病気にかかっておられたとします。調べてみましたが、この病名を掲載している医学書は帝国の中にはありません。つまり、病気の詳細や治療法について、何らかの見識をもっているのは、今、帝国全ての医学関係者を挙げてもバウアーシュミット医師しかいないことになります。その場合、もし、彼を失うことになったら、皇帝陛下の治療に当たれる者は誰もいな

い……そして、もし、もし、『変異性劇症膠原病』が致命の病であるとすれば……」
　ヒルダの声は小さく、立ち聞きを懼れるかのように囁くように小さく震えていた。
　キルヒアイスは目を閉ざし、会議の列席者を一人一人思い浮かべているようだった。かつてラインハルトに『ゴミ箱の底を覗いても、そこに美を見出す』、あるいは『キルヒアイスが先生だったら、道を踏み外す生徒はいなくなるだろう』などと揶揄されたほどに他者を信じるに篤いキルヒアイスである。だが、そのキルヒアイスにして残念ながら、誰一人として、ラインハルトの不在を積極的も消極的にも願っている者はない。そう信じることはできなかった。今、新王朝はラインハルト一人の個性によって一つの組織として成立している。ラインハルトを失えば、新王朝は求心力を失い、たとえるならばカーレ・パルムグレンを失ったラグラン・グループ同様、直ちに崩壊と分裂、新たな戦乱の時代を引き寄せてしまうに違いなかった。
「分かりました。直ちにランメルスベルグ星系に護衛の部隊を派遣します。万一にもバウアーシュミット医師の身辺に危害が及ぶことのないよう、万全の注意を為せとの指示を与えます」
　インタフォンで副官……ヒルダも知っていた、タウゼントシュタイン大尉ではなく、先日来の新任副官のラーゼン中尉だった……を呼び、ランメルスベルグに最寄りの部隊に連絡を取らせる。
「絶対に信頼できる装甲擲弾兵の分隊を作り、フランツペーター・ヨハンネス・バウアーシュミット文理科大学医学部准教授、彼を安全に帝都まで護衛するよう手配してください。宜しいですね、中尉。中尉自ら人選を確認し、身許の確認を行ってください」
　了解という元気の良い応答が返ってきて、キルヒアイスはようやく僅かに緊張を緩めて、ヒルダに微笑みかけた。
「ありがとうございます、ライ……陛下のことを心配頂いて」
　臣下として当然のことです……応じようとして、ヒルダは言いよどむ。皇帝主席秘書官、あるいは幕僚総監としての公的な言葉が、この時はひどく似つかわしくなく感じたのだ。
「わたしは……皇帝陛下のいらっしゃらない宇宙に耐えられないと思うんです。万に一つも、万々にひとつも陛下がわたしの目の前からいなくなってしまわれるなど、考えることもできません」
「フロイライン・マリーンドルフ……」
　ある意味、余りにも私的な想いをそのまま言葉にしたかのようなヒルダに、キルヒアイスは驚かなかった。
「わたしもです、フロイライン・マリーンドルフ。皇帝陛下……というより、ラインハルトさまは、わたしにとって半身とも言うべき存在です。あなたも同じ想いでいてくださるのですね」

　会議室を出たオーベルシュタインを待っていたのは軍務省調査局長を務めるフェルナー准将だった。
「例のグレーチェン・ヘルクスハイム同盟軍大尉の件ですが、ミュラー提督の報告書に含まれておりました。御前会議での議題にするほどのことはないと考え、報告はいままで控えておりました」
「行方不明か」
　面白くもなさそうに、オーベルシュタインはフェルナーの差し出した書類に義眼を走らせた。
「同盟政府は彼女をヤン一派と見なして捕縛するつもりだったよ

うです。ヘルクスハイム大尉はバーミリオン会戦でヤン艦隊に加わっていますが、あの時期、戦える士官でヤン艦隊に属していなかった同盟軍軍人がいたとすれば、そちらの方が驚きです」
「怯える犬は、風になびく柳の枝にも吠えかかる。その程度のことだ」
にべもなかった。軍務尚書の見せた、意外に詩的な表現力への驚きは押し隠して、フェルナーは問いを重ねる。
「いかがなさいますか？」
「いかがするとはどういうことだ、准将？」
フェルナーは言う。政争により帝国を逐われたヘルクスハイマー伯爵家の娘。亡命の途上、係累のほぼすべてを亡くしている。一八歳という年齢は、二四歳の皇帝とも十分に釣り合いが取れる上に、同盟軍の士官学校を首席に近い成績で卒業し、現在は一八歳にして大尉の階級を保持する。グレーチェン・ヘルクスハイムはオーベルシュタインが提示した、皇帝ラインハルトの皇妃候補としての条件を唯一満たした女性である。
「卿には考えはないのか？」
軍務省の職員誰しもが胃に穿孔される苦痛から免れない。オーベルシュタインにその視線を、しかし、フェルナーは恐れ気もなく受け止めた。
「放置しておきましょう。行方を捜す必要もありませんし、他の候補を同盟政府に探させることもないでしょう」
「ほう……？」
意外なことを言う……という表情ではなかったし、もとよりフェルナーでさえオーベルシュタインの表情を読み解くのは至難の業である。根拠の説明を求められていることは十分に了解し得ることだったから、フェルナーの言葉に澱みはなかった。
「他を当たる……には既に同盟政府は当てになりませんし、シュタインメッツ提督もそれどころではありますまい。それに、同盟も今回の騒動で余程に衰えましょうから、同盟の市民に帝国への近親感を抱かせるという意味で、強いて同盟に皇妃候補を求める意味は薄くなった。小官はそう考えます」
「卿の判断に任せよう」
書類をフェルナーの手に戻し、オーベルシュタインは義眼に無機質な光を閃かせた。
「ヘルクスハイム大尉の所在を積極的に求める要はない。ただ、同者が帝国軍の保護下に入った場合、速やかに私に知らせるよう周知しておけ」
「は、了解致しました、閣下。グレーチェン・ヘルクスハイム同盟軍大尉が帝国軍の保護下に入った場合、速やかに軍務尚書閣下に報告致すべく、軍各所に周知徹底致します」
フェルナーがわざとのように復唱して見せたのは、この義眼の軍務尚書の真意を質してみたい気分を抑えきれなかったからである。軍務尚書は未だ、この見も知らぬ亡命者の女性を本気で皇妃候補に据えるつもりなのかどうか。
「復唱は余計だ、初年兵でもあるまいし」
などとオーベルシュタインは言わず、無機質な一瞥を残しただけでマントを翻す。フェルナーが表情を読み取る暇も……もっとも読み取れたとも思えないが、言葉での反応を得る隙もなかった。
「やれやれ……本気なのかな」
ちらと視線を走らせた先に、ヒルダの短い髪がくすんだ金色の光を弾いていた。

「彼女で十分……と言うか、彼女以外にそうそう候補がいるわけはないと思いますが……ね。ま、これも宮仕え……というやつですから」
軍務尚書が業務の遅滞を嫌う。無駄口もほどほどにフェルナーもまたオフィスへ向かう足取りを速めたが、ふと思いがけ思いつきにその歩みを止める。
「まさか……な」
オーベルシュタインはナンバー2の存在を嫌う。一人目の人物が皇妃の宝冠を戴く道はすでに封じる能わず。オーベルシュタインはそう考えているのかも知れない。とすれば、軍務尚書は皇妃の玉座に複数の人物を座せしめようと考えているということはないだろうか。
フェルナーが慌てて視線を巡らした先には、既にくすんだ金髪の女性の姿はなかった。